千夜一夜

佐月夏蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
千夜一夜

【Ｎコード】
Ｎ２８１０Ｙ

【作者名】
佐月夏蓮

【あらすじ】
教会を兼ねた孤児院で育てられた青年アベルは、今日も貴族嫌いのシスター・エルのせいで仕事をひとつ潰されてしまう。
吟遊詩人をやって生計を成り立てている彼にとって、貴族も裕福な金持ちも大事なお得意様だ。
しかし貴族嫌いのシスターのせいで、彼はよく仕事を潰される。

運命の岐路を迎えたこの日もそうだった。

運命の運び手の少女と出逢ったときも、彼は仕事を潰され時間を持て余していたのだ。

深い意味のないような、どこにでも転がっている出逢い。

それが自分の運命を根底から変えてしまうとも知らずに。

彼はひとつの出逢いを体験する。

その出逢いが次の出逢いを呼び、アベルの運命は急速に変わっていくのだった。

この物語はブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

序章（前書き）

新しい物語の始まりです。
本当はもうすこし様子を見るつもりでしたが、ブログの方で問題が発生したので、新連載に踏み切りました。
「失われた恋人～時に消えた伝説～」共々よろしくお願いします。

序章

今日も穏やかに夕陽が沈んでいく。

何事もなく日は過ぎて人々が家路につく頃、青年はじっと中空を眺めていた。

今日は久しぶりの貴族の邸宅でのパーティーにお呼ばれしていたのだ。

彼、アベルはそういう儲けられる機会は、なるべく逃さないようにしている。

ただでさえ裕福とは縁のない生活なのだ。

儲け時を誤ってはならない。

なのに。

口から深々とため息がもれる。

「エル姉に今日の仕事場が、貴族のパーティーだって知られたのが失敗だったな」

噴水の傍に腰かけたまま、だれにともなく愚痴る。

彼の姉代わりでもあるシスター・エルは大の貴族嫌いだ。

貴族と名のつくものなら、なんでもキライで、寄付金なども絶対に受け取らない。

相手が好意や善意で申し出ていても、だ。

おかげで生活はいつも火の車。

アベルが小さい頃に遊びで覚えた吟遊詩人の腕前がなかったら、果たして今頃生きていたかどうか怪しい。

とっても怪しい。

なにしろ教会は孤児院も兼ねているのに、エル姉は寄付金を受け取らないのだ。

貴族が名をあげるためとはいえ、善意を前面に申し出ていても。

そのためにアベルが小さい頃などは食べる物にも困る始末。

アベルが何気なく始めた吟遊詩人が大当たりしなかったら、きっと自分も子供たちも飢え死にしていた。

しかし吟遊詩人を名乗るからには、儲けるために貴族や裕福層は避けては通れない。

彼らこそ吟遊詩人に大金を投じてくれる相手だからだ。

選り好みしていたら、得られるお金も得られない。

しかしエル姉にはその論理も通じない。

とにかく「いやっ！！」の一点張りで通してしまうので、アベルはなるべく自分の仕事先は知られないようにしている。

普段からとても気をつけていたのだ。

なのに今日に限って知られてしまった。

「忌々しい」

呟いてポケットからカードを取り出す。

今日のパーティーの招待状だ。

これがないと入れないとかで、パーティーで演奏するだけのアベルにも送られてきた。

それですべてがバレてしまった。

エル姉は恐ろしい勢いで怒り狂い、アベルを部屋に閉じ込めた。

パーティーに出られない時間帯になるまで。

おかげで解放された今、こうしてすることもなく、夕陽を眺めている状態だ。

貴族はここ最近の怪盗騒ぎのせいで、開場時間を過ぎると、招待状を持っていても会場には入れてくれない。

その時間はとっくに過ぎていて、つまり招待状があって、パーティーには欠かせない吟遊詩人でも会場には入れないのだ。

「これでまたひとつ信頼を失ったなあ。もし悪い噂でも広がったら、俺、どうするんだ？」

さすがに心配だ。

今では孤児院を支えている生活費も教会の維持費も、捻り出しているのはアベルだというのに。

悪い噂が広がって仕事がなくなったら、とたんに生活は成り立たなくなってしまう。

「とりあえず……こんなところでボーッとしていてもしかたがないから帰るか。フィーリアも心配しているだろうし」

エル姉に閉じ込められた後で、さすがに怒って孤児院を飛び出してきたので、妹代わりのシスター見習いフィーリアが、とても心配そうに見送っていた。

それはわかっていたのだが、あのときはだれのせいで苦労していると思っているのかと思うと、どうしても我慢できなかったのだ。

立ち上がったとき、だれかにドンッとぶつかられた。

完全に不意をつかれたので上体が揺れる。

「あっ」

高い声が悲鳴のような声を出すのを聞きながら、アベルの身体はそのまま噴水の中に落ちていった。

序章（後書き）

第1章は毎日更新します。
第2章は1日置きに第3章からは土曜日の配信になります。

第1章　教会と孤児院（1）

「踏んだり蹴ったりだ。ついてない」

連れに聞こえないようにアベルは愚痴る。

噴水に突き落とされた後、アベルは唖然として相手をみたが、相手はそれは可愛い女の子だった。

長い金髪を背中でひとつに括っていて、可愛いエプロンドレス姿。

一見して良家のお嬢さんといった風情だった。

アベルにぶつかって噴水に突き落としてしまったことでオロオロしていた。

さすがに怒るに怒れず、アベルは気にしなくていいと笑ったのだが、どういうわけか相手の少女は気に病んで引かなかった。

いくら責任感が強い少女だったとしても、ちょっと異常なほどに。

それでそれとなく探りを入れると、どうも少女は行くアテがないらしかった。

ここで出逢ったのが救いとばかりに、アベルになついてきた次第である。

呆れて突き放そうかと思ったが、その事情を聞いた瞬間、少女のお腹がなった。

少女は赤くなってお腹を何度も叩いていたが、これには怒る気も失せてしまった。

それで結局、孤児院まで連れていくことになっている。

まあ元々が身寄りのない人々の集まりのようなところだ。

ひとりやふたり増えたところで困る人はだれもいない。

しかし相手のことをなにも知らない状態で連れていくのも変だ。

さりげなく振り返る。

少女は後ろをついて歩きながら、物珍しそうにキョロキョロしている。

その様子からみて、絶対に行くアテがないなんて嘘だろ、と、アベルは内心で突っ込む。

おそらく帰る家はあるのだ。

あるのに帰る気がない。

もしくは帰れない。

そんなところだろうか。

どこかの裕福な家のお嬢さんが、親とケンカして家出でもしてきた。

そんなところかなとアベルは考える。

「きみ……名前はなんていうの？」

「名前……ですか？」

突然話しかけられた少女は、幾分、身構えた様子をみせた。

「そう。名前。呼ぶ名前がないと不便だし。あ。俺はアベル。アベルっていうんだ」

「アベルさ……んですか。素敵な名前ですね」

微笑んでそう言ってから、少女はすこし間をあけた。

「わたしはレティといいます」

答えてきた少女にアベルは一瞬だけ視線を向けたが、なにも言わず「そう」と答えた。

本名じゃないなと読み取りながらも。

「これから俺が帰る家は孤児院だがら、ちょっと騒がしいかもしれないけど、あんまり気にしないで」

「孤児院？」

「身寄りのない者が集まって暮らしてるところだよ」
わからないかなと思って説明すると少女は赤くなる。
「そのくらいわかります。わたしにだって」
ブツブツと口の中で愚痴っている。
どうやら意味が通じたらしい。
「でも、それだとわたしが行ったら、ご迷惑ではないですか？」
「困ってる人を助けるのが教会の役目だから」
「教会？　さっきは孤児院って……」
「教会が孤児院を兼ねてるんだ。この辺だと珍しいらしいけど」
「たしかに珍しいですね。普通は孤児院と教会は別々だし」
そこまで言ってから、少女は首を傾げた。
「それだと生活はどうやって？　教会への寄付金だけでは食べていけないのでは？」
「あー。うん。その辺は適当にね」
「適当……」

適当でなんとかなるのだろうかと、少女の声に出ている。

しかしそこまでの内情を明かす必要性を感じなかったので、アベルはなにも説明しなかった。

「とりあえず怒られる覚悟だけはした方がいいな」

「どうしてですか？　あ。それはわたしが怒られるのはわかりますけどっ」

「いや。数少ない余所行きの服を汚したから、姉代わりのシスターに責められるんだよ」

ここまで言ってアベルは肩を竦めてみせる。

「この服を買うのに、どれだけのお金が必要だったと思ってるってね。それにこの服は普通に洗濯できないし」

カードが届く前に出掛ける準備を整えていたので、アベルはパーティー用の正装を着ていた。

アベルにしてみれば、かなり奮発して買った服だ。

それはエル姉も知っているので、この系統の服を汚すと、それはそれは責められる。

本当に普通に洗濯できないらしくて、使う洗剤やら洗い方やら、すべて特注になるらしい。

高価な服というのは扱いも特殊らしいのだ。

その辺はフィーリアに任せきりだから、アベルは詳しくは知らない。

だが、だからこそ、このことで責められると強く言えないのだ。

フィーリアに迷惑をかけたと責められると言い返せないので。

しかしアベルが思索に耽っているあいだ、少女はふしぎそうに首を傾げていた。

「せんたく？」

意味を知らないと言いたげな声にアベルが振り返る。

少女はそれはふしぎそうな顔をしていた。

（もしかして？）

「洗濯……知らない？」

「あ。いえ。知っています」

「ふうん。知ってるんだ？」

白々と問えば少女は必死になって頷いた。

どうやらこれでごまかせると思っているらしい。

思っていた以上の箱入り娘だ。

これはそうそうに迎えがくるに違いない。

それまで丁重に相手をすればいいかと、アベルはさっそく覚悟を決めた。

こういうお嬢さんの道楽には、まともに相手をしないにかぎる。

でないとエル姉がキレるし。

第1章　教会と孤児院（2）

教会がみえてきて隣に建っている大きいが古ぼけている建物の扉を開ける。

少女もおっかなびっくりついてくる。

「フィーリア。ただいまー」

声を投げるときも、どうしてか「エル姉、ただいま」とは言えなかった。

いつもなら「エル姉、フィーリア。ただいまー」なのだが、このときばかりはエル姉の名前は出せなかった。

「あっ。おかえりなさい、お兄ちゃんっ！！」

シスター姿のフィーリアが現れた。

金髪を肩で揃えていて瞳は紫。

自慢の妹だ。

「ただいま、フィーリア」

頭を撫でるとフィーリアが幸せそうな顔になる。

まだ１４歳。

それなのに家事をすべて任せて、おまけにシスター見習いとしての仕事もある。

苦労させてるなとつくづく思う。

「お兄ちゃん、その人、だれ？」

「ああ、うん。レティっていうんだって。行くアテがないとかで、腹を空かせてたから連れてきたんだ。なんかある？」

「んー。お夕飯の残りなら。あ。お兄ちゃんの分もちゃんとあるよ？」

「わかってるよ。フィーリアが俺の分を食べるとは思ってないから」

「それからお姉ちゃんがお兄ちゃんに謝っていてほしいって」

「……」

「お姉ちゃん、とても後悔してたよ？　自分の価値観を押しつけたって。全部お兄ちゃんのお世話になっているくせにでしゃばりだったって。お兄ちゃんが出て行った後で泣きそうな顔してた」

「……そっか」

エル姉はたしかに貴族がきらいで、貴族絡みだと暴走してしまう。

だが、感情で動いても、こうやって反省することのできる女性だ。
だから、アベルは彼女をきらえないのだ。
どれほど苦労させられていても。
今頃、教会の掃除でもして反省している頃だろう。
後で慰めておこうと心に決める。
そうして控えめに立っている少女の方を振り向いた。
「こっちにおいで。食べさせてあげるから」
「ごめんなさい。ご迷惑でしょう？」
レティがそう言えば、あからさまに怪訝な顔になって、フィーリアがアベルの耳許にささやいた。
「お兄ちゃん。このお姉ちゃん、帰る家がないなんて嘘でしょ？こんな上品な孤児みたことない」
「ああ。たぶん家出だと思う。まあ本人が家に帰れないって言うんだ。今は面倒をみておいて迎えがきたら、そのときに考えればいいだろ？　本人が帰りたがるかどうかは別として」
「エルお姉ちゃん、怒るよ？　もしこのお姉ちゃんが貴族だったりしたら」
「そうだったとしても、困ってることには違いない。エル姉がそこ

で追い出すのは、シスターとして失格だろ？　そこはフィーリアも説得しろよ。とにかく飯も食えないくらい困ってるのはたしかなんだからさ」

「食べられるだけのお金があって食べないのに困ってると言われても……」

「あのな、フィーリア。貴族って案外、金持ってないものなんだ」

「そうなの？」

きょとんとした顔になるフィーリアにアベルは重々しく頷いた。

「金持ち金持たずっていうのかな。貴族は出歩くときに金を持ち歩かない。つまり家出なんてしても、食べるお金は持ってないってことなんだ」

「それで家出してなんとかなるの？」

「普通なら悪い奴にさらわれて終わり、なんだろうけど、この娘の場合、俺と逢ってるからな。その分、運がよかったってことで」

「お兄ちゃんの貧乏クジを引く損な一面変わってないね」

呆れたように言われて、アベルは慌てて咳払いした。

「とにかくっ。飯だ、飯っ！！」

アベルは大股に歩いて行ってしまう。

フィーリアはクスクス笑って、呆気に取られているレティの方を振り向いた。

「お兄ちゃん、先に行っちゃったから追いかけよう？」

「あ。はいっ」

慌てて返事をするレティに世間知らずな一面が覗いて、フィーリアは改めて実感した。

レティの運のよさを。

アベル以外に拾われていたら、今頃どうなっていたか。

その辺をわかっていないらしいので、レティの運のよさも本物だと感じていた。

第1章　教会と孤児院（3）

時刻は深夜。

孤児院の一室に院長兼神父のシドニーとシスター・エル。

そしてシスター見習いのフィーリア。

最後にアベルが集まって頭を悩ませていた。

「どうするの、アベル？」

シスター・エルは不機嫌だ。

明らかに自分たちとは住んでる世界の違う少女をアベルが連れてきたのだ。

おまけにすぐくると思っていた迎えはこなかった。

少女レティは今健やかに眠っていたりする。

一応あの後エルにも紹介して、シドニーの許可ももぎとり、レティはここへの滞在を許された。

しかしそれはだれもがすぐに迎えがくると踏んでのことだった。

全く迎えがこないと言うのは想定外だ。

彼女の身なりこそ、そこそこ上等だが一般の平民と言っても通用するていどだ。

だが、立ち居振舞いというのだろうか。

みせる態度や振る舞いが、どうみても平民のそれではない。

明らかに貴族層、違っても裕福層のものだった。

アベルたちと同レベルではないのは明らかだ。

そんな少女を匿っていたら、最悪、誘拐ととられるかもしれない。

シスター・エルはそれを危惧しているのである。

保護しているだけなのに誘拐したと思われるのではないか、と。

「とりあえず本人が身元については話したがらないんだ。今はどうすることも……」

シドニー神父が言いかけたとき、人一倍耳のいいフィーリアが立ち上がった。

「だれかきたみたい。この靴音……マリンお姉ちゃんかな？」

「「マリンが？」」

アベルとエルの声が重なる。

やがてすぐに控えめなノックの音がした。

「シドニー様はいらっしゃいますか」

そんな挨拶を投げながら入ってきたのは、女だてらに騎士をやっているマリンだった。

この近所が実家でアベルたちとも兄妹同然に育ってきた少女である。

凛々しい立ち姿にエルが嬉しそうに出迎えた。

「久しぶりね、マリン。こっちに戻ってきたのは何年ぶり？」

「お久しぶり、エル姉。さっそくで悪いけど……レティがこなかった？」

「レティって……マリン、知り合いなのか？」

アベルが驚いた声を出すと、マリンがその漆黒の瞳を光らせた。

「アベル。またアンタなの？」

「いや。また俺かと言われても……」

「迷子を見つけたらすぐに騎士団に報告すること。何度言わせたら気が済むのよ？　ここに連れ込むなってっ！！」

「迷子って……レティはどう見ても１５は過ぎてるだろ？　１６くらいじゃないのか？」

呆れ顔になるアベルにマリンは強気で言い切った。

「家に帰れなくなってるなら迷子でしょうがっ！！」

「そりゃあそうかもしれないけど、飯を食わせるくらいいいじゃないか。本人だって見知らぬ俺の前で腹を鳴らすほど減ってたんだし」

「ああ。お労しい」

頭を抱え込むマリンに、どうやら彼女が迎えらしいと悟って、シドニー神父が割り込んだ。

「それでマリンは彼女を迎えにきたのかい？」

「迎えと言いますか……」

「違うのかい？」

「いえ。迎えには違いないのですが、レティが素直に戻られないのではないかと危惧していて」

マリンはシドニーを尊敬しているので、あからさまに態度が違う。

我が身と比べれば多少は不満も出るが、アベルは納得して呟いた。

「まあなあ。彼女は身元に関することは、一切話さなかったし。明らかに家出って感じだったからな。マリンが迎えにきたところで素

直に帰らないだろうけど」

「アンタねえ」

マリンが呆れている。

どうやら説得しろと言いたいらしい。

たしかにアベルは子供の世話は慣れているし、職業柄。女性の相手も慣れている。

普通なら説得くらい容易いのだが、なんとなく気が進まなかった。

それはたぶん彼女が見知らぬ世界を一生懸命、知ろうと努力していたからだろう。

レティは知らないこと、わからないことを、わからないままでは終わらせなかった。

わからなくても理解できなくても、必死になって理解しようと、自分でも同じことをしようと努力していた。

でなければとっくに騎士団に報告している。

家出なのははっきりしていたし、罪に問われる可能性も熟知していた。

だから、普通なら届け出ているのだ。

レティが世間を知ろうと、あんなに必死でなければ。

第1章　教会と孤児院（4）

家出したのにもなにか理由があるんだなと、親子喧嘩くらいの理由ではないと知ったから報告する気が失せた。

そのことではエルにもシドニーにも問われていたアベルである。

同じことをマリンに責められても答える言葉がない。

「説得する気がないの？　アンタが説得すれば一発でしょうに」

「マリンが彼女と親しいならわかるはずだ。これは軽い気持ちでの家出か？」

「……」

「彼女には彼女の考えが意志がある。それを無視して連れ戻そうとするなよ。そりゃ彼女の両親でも出てきたら、俺だって素直に説得するけどさ。親に心配をかけるのは、やっぱりよくないと思うから」

天涯孤独のアベルが言うと重さのある言葉である。

とっさにマリンも言い返せなかった。

「説得したければ自分でやれよ。俺を頼るな」

「アベル」

「お兄ちゃん。そんな言い方……」

「俺の目からみて彼女は自分に必要なことをこなしているようにみえる。だから、俺からは説得したくない。それでも説得したければ自分で説得しろ。他人を頼るんじゃない」

「わかった。もう頼まないからいい」

マリンは唇を噛みしめてそう言った。

「シドニー神父。レティはどこですか？」

「2階の客室で寝ているよ。しかし今から起こすのかい？　明日にしてあげたら」

「レティのご両親がとても心配されています。連れ戻すのがわたしの役目です。申し訳ありませんが」

それだけ言ってマリンは踵を返した。

それからしばらく経っても、マリンは2階から降りてこなかった。

時折、言い争うような声が聞こえてくる。

それを階下で聞きながら、アベルたちは難しい顔をしている。

案の定レティが帰ることに同意しないらしい、と。

やがて仏頂面のマリンがひとりで階段を降りてきた。

「マリン？」

シドニーが心配そうな声を投げる。

「玉砕しました」

「そう……なのかい？」

「申し訳ありませんが、しばらくレティをお願いします。わたしは彼女のご両親に報告して、なんらかの手を打ちますので」

「それはいいけど彼女……どこの家の令嬢なの？　まさか貴族じゃないでしょうね？」

「お姉ちゃん……」

フィーリアがエルの手を引っ張るが、エルはマリンを睨む眼を外さない。

アベルとシドニーは男同士で顔を見合せた。

「ごめんなさい、エル姉。それについては触れないで」

「マリン……」

エルが複雑な声を出す中、マリンがアベルを振り向く。

「ちょっときて」

「なに？」

「いいからきなさいっ！！」

怒鳴られてアベルは孤児院の外まで連行された。

人気のない静かな住宅街。

マリンと向かい合って立ち、アベルは不思議そうな顔をしていた。

「アンタは貴族にも顔がきくでしょうし、隠しても隠せないだろうから、今から教えておくわ」

「彼女の素性について？」

それしかないと思って問うとマリンは苦い顔で頷く。

「アンタが貴族相手に商売してること、わたしは忘れてないわよ」

「だろうな。仕事柄知られてるとは思ってた」

「アンタって飄々としてるのに、肝心なところでボケてるというか。それだけ顔が広くてどうして気づかないの？」

「なんの話？」

首を傾げればマリンは絶望的な顔をした。

「レティと聞いて、あの金髪と銀の瞳をみて、どうして気づかない

の？　アンタほど貴族の事情に通じた人が」

「レティ……金髪、銀の瞳？」

呟いてふと思い出す。

噂に聞いていた人の名を。

「まさか……レティシア王女？」

このディアンの王女で姉、レイティアと共に第一王位継承権をもつレティシア。

彼女は第一王女レイティアとは双生児で、従ってその関係で王位継承権も同等。

第二王女だが情勢次第では女王になるかもしれないという立場にいる。

呟けばマリンが苦い顔のまま頷いた。

第1章　教会と孤児院（5）

当たっていたと知って青くなる。

「自立を歓迎したい。アンタさっきそんなこと言ってたけど、そういうワガママが許されるお立場だと思う？」

「それは……」

彼女が王女ならたしかにこの行動は無謀と言わざるを得ない。

本当にアベル以外が拾っていたら、どうする気だったんだろう。

「わたしだってレティシア様が自立をしたいなら歓迎したい。そのための手助けだってしたいと思ってる。でも、現状は無謀よ」

「たしかに……」

第一王女ではなく第二王女を擁立したい派閥はいる。

現実に存在するのだ。

そんな輩に捕まっていたら利用されただろうし、第一王女派に捕まるのも危険だ。

たしかにマリンがキレるだけの理由があったのだと今更のように納得した。

しかし一般の平民であるアベルが、そこまで貴族の事情に詳しい

のもどうかと思うが。

マリンがそのことに疑問も抱いていないことが、なおさら変な気分だ。

アベルはそこまで貴族の世界に踏み込んでいるのだろうか？

「レイティア様だってご心配されているわ。レティシア様はレティシア様だけのお考えで動けるお立場にはないの」

「それは本人もわかってるんじゃないかな」

「アベル？」

「俺がさっき自立したいならさせればいいって言ったのは、彼女が必死になって世間を知ろうと努力していたからだ。少なくとも無責任な行動じゃない。俺はそう感じたよ」

「でもっ」

「過保護なだけではなにも変わらないよ」

「無責任なこと言わないでっ。それでなにかあったら、だれが責任を取れるのっ！？」

「マリン。少なくとも王族なら、国を統べるべき立場に立つのかもしれないなら、自分の言動の責任は自分で取るべきだ」

「……それじゃ通らないのよ、現実は」

「自分の後始末もできない者が国を統べる。それでいいと思ってるのか、マリン？」

「それは……思ってない。思ってないけど実際になにかあったら、責任を求められる者が絶対に出るのっ」

「それを片付けるのも彼女の責任だろ？」

どう言っても譲らないアベルにマリンは深々とため息をついた。

「アベルってホントに頑固だわ。しばらく忘れてたわ」

「悪いな。だれ譲りかは知らないけど頑固で」

「バカ」

呆れたように言い返してから立ち去ろうとして、ふとマリンがアベルを振り向いた。

アベルは不思議そうにそんな彼女を見る。

「アベルは……」

「なに？」

「だれ譲りかはわからないってさっき言ったけど、わたしよく似た人……いえ。御方を知ってるわ」

「へえ。マリンの知ってる偉い人に俺が似てるって？」

「柔和そうな顔立ちなのに、一度決めたことを譲らないところなんてそっくりよ」

笑う彼女に笑ってみせた。

遠ざかる彼女を見送って、ふと左腕に視線を落とす。

服の下に隠された物を思い浮かべる。

それはずっしりと重い気がした。

「おはようございます」

翌朝、食堂に現れたレティことレティシア王女は、そう言って深々と頭を下げた。

受け入れたアベルたちは驚いた顔をしている。

「昨夜はマリンがお騒がせして申し訳ございませんでした」

「いや。それはいいのだが……帰らなくていいのかい？」

シドニー神父の優しい声に、レティシアが答えようとしたとき、表で馬の蹄の音が響いた。

ハッと彼女が顔色を変える。

アベルは窓からそっと外を覗き込んだ。
道を塞ぐようにして、豪奢な馬車が止まっている。
ただし身分がバレないように配慮されたのか。
王家所有の馬車ではなかった。
その扉を恭しくマリンが開けている。
優雅におりてくるのはレティシアと同じ顔をした女の子。
おそらく第一王女レイティアだろう。
さすがにふたり揃ったらエル姉にバレるんじゃないかとアベルも青くなる。
「アベルさん？」
彼女の呼び声にアベルは苦い顔を向けた。
「お姉さんが迎えにきたみたいだよ、レティ」
「え……どうして知って……」
青ざめるレティシアにアベルは苦い笑み。

第1章　教会と孤児院（6）

「俺さ、これでも吟遊詩人なんだよ。そういうことには詳しいから」

「吟遊詩人？　あの舞踏会などでもよく演奏する？」

「そう。だから、俺に隠そうとするのは無理」

「そうだったんですか。騙して申し訳ございません」

深々と頭を下げるレティシアにアベルは微笑んでみせる。

「悪気がなかったことはわかってるから構わないさ」

「ですが」

「俺に対する言い訳よりお姉さんに対する言い訳を考えた方がいいんじゃないか？」

「そうですね。どうしましょう」

オロオロするレティシアに昨日の彼女が思い出される。

本当に箱入りなんだなあ、と。

自分とは偉い違いだ。

「どうしてお兄ちゃんがレティさんのお姉さんを知ってるの？」

フィーリアの声にアベルが振り返る。

シドニーもエルも怪訝そうにふたりを見ている。

「顔を見ればなんでわかったのか、すぐにわかると思う」

その言葉は間もなく証明された。

何故ならフィーリアが出迎えて連れてきた少女は、レティシアに瓜二つだったからだ。

シドニーもエルも唖然としている。

格好も似たり寄ったりで、入れ代わったりされると、見分けられなくなりそうだった。

「レティ」

マリンに先導され入ってきた少女は、そう名を呟くなり彼女の頬を叩いた。

これにはアベルも唖然とした。

王女同士で殴り合いになるのかと。

だが、レティシアは叩かれても反撃はしなかった。

無言で怒りを示す姉姫に頭を下げる。

「ごめんなさい。姉様」

「悪いことをしたとわかるのなら戻っていらっしゃい」
「悪いことをしたとは思ってるわ。でも」
「まだ戻りたくないなんて駄々をこねるつもり？」
「駄々をこねるとかじゃなくて、わたしはもうしばらくここにいたいの。お父さまたちだって説明したら、きっとわかってくださるわ」
「だったら先に説明したら？　わたしが迎えにきている時点で、あなたが判断を誤ったことは証明されているわ」
「だって……戻って説明したら、きっと二度と出られない」
泣き出しそうなレティシアにアベルは可哀想になった。
彼女は王女として必要不可欠な行動を起こしているだけなのだ。
説明不足なのは否めないかもしれない。
でも、説明不足だったという理由だけで責められるのは気の毒だった。
さて。
王女殿下をなんて呼ぼう？
悩みつつ声を投げる。

「あのさ、レティのお姉さん」

声をかけられたレイティアがアベルを振り向く。

その眼がすぐに驚きで見開かれた。

「伯父様？」

「は？」

まっすぐに自分を見て言われたが、アベルは一瞬シドニーのことかと誤解した。

「シドニー神父。知り合いですか？」

アベルがシドニーを振り向いて問う。

「いや。あれはどうみてもアベルを見て言ったのでは？」

「え？　でも、俺まだ１８ですし、おじさんなんて言われる歳では……」

１８でおじさんだったら、シドニーなんておじいちゃんだ。

そう呆れ返るとレイティアも失態に気づいたらしい。

慌てて咳払いした。

「ご、ごめんなさいっ。あなたがあまりに伯父様に似ているので、つい」

「伯父様って亡くなった伯父様？　お父さまの兄上の？　アベルさんはそんなに似ているの？」

「レティは伯父さんの顔、知らないのか？」

「わたしはそういうことには疎くて。姉様が知る必要はないからと、肖像画も見せていただけなくて」

「へえ」

本物の箱入り娘だなとアベルは思う。

双生児の姉からも大事にされていたようだ。

しかしお父さまの兄上ってことは現国王の兄君だよな？

たしか現王は元々は第二王子で、前王が急死したせいで突然、王位を継がなければならなくなったはずだ。

前王には子供はいなかったと聞いている。

その前王にアベルが似ている？

第1章　教会と孤児院（7）

不思議な偶然もあるものだ。

「不思議な偶然だな」

「不思議な偶然？　そう……ですね」

「姉様？」

妹の心配そうな問いかけにレイティアは微笑んだ。

「なんでもないのよ、レティ」

「話を戻すけどレティのお姉さん」

「申し訳ございませんが、わたしにもレイ……という名がございます。そうとう呼び方は不本意です」

悔し紛れにごまかす声にアベルはちょっと笑う。

笑われてレイティアが赤くなった。

「じゃあレイ。俺からも頼むから、もうすこしのあいだだけ、レティの好きにさせてやってくれないか？」

「ですが、これはわたしたちの問題で」

「だからこそ、俺たちの問題だろ？」

「なにをおっしゃりたいのですか」

「レティは将来的に必要な行動を起こしてるだけだ。それは同じ立場に立つレイにならわかるはずだ。ここで得る体験はレティにとって、もしかしたらレイにとってだって得難いものになる」

「……」

「おままごとでもいいんだよ。知らないことを知らないままで終わらせず知ろうとする努力。それは尊いものだよ」

「ですがお父さまがなんとおっしゃるか」

「そうだなあ。マリンが護衛として付き添う……じゃ納得しないか？」

首を傾げるアベルにマリンが食って掛かる。

「どうしてわたしを巻き込むの、アベルっ！！」

「へえ。じゃあレティを放っておけるんだ？　マリンに？」

「っ」

グッと詰まるマリンにアベルが人の悪い笑みを見せている。

「もしかして1本取られたことを拗ねてる？」

レイティアはアベルに顔を覗き込まれ赤くなった。

なんだかこの人は調子が狂うと顔に書いている。

「まあレティが起こした行動は、本来ならレイが起こすべき行動だろうから、多少は拗ねるだろうなあ」

「あの、アベルさん？」

「わからないか？　レイはレティに負けたから悔しいんだよ」

指摘されてレイティアの顔がますます赤くなる。

レティシアは意外そうに姉姫の顔を見た。

「悔しいのならレイも真似したらいい」

「アベルっ。勝手に話を進めないでっ」

シスター・エルが慌てだす。

明らかに貴族らしいふたりを受け入れるなんて、彼女的には遠慮したいことだから。

「エル姉、シスター失格。神のお慈悲はどこいったんだ？」

呆れ顔で言われて言葉に詰まる。

シドニーは苦笑していて、フィーリアは不安そうにアベルを見ていた。

「とにかくレイがどうするかはともかく、レティはもうしばらくこのままでいさせてやってくれ。その方がレティのためだから」

真摯に説得されてレイティアは妹姫を振り向く。

「あなたはどうしたいの、レティ？」

「わたしはもっと知らないことを知りたい。知ることは大事だと思うから。それは昨夜散々感じたの。わたしは籠の中の鳥だって。このままじゃいけないって」

女王になるならないは別として王族として、このまま民のことをなにも理解しないままではいけない。

それは昨夜レティシアが感じたことだった。

必死な妹の様子にレイティアはまたため息をついた。

「戻ってお父さまを説得してみます。それまではマリンをつけておくわ」

「ありがとう、姉様っ！！」

抱きつく妹を抱き止めて、レイティアはまたため息をついた。

「あなたはお名前はなんて申されましたか？」

振り向いたレイティアに問われて、アベルが答えようとしたとき、子供が投げ合っていたらしい木の棒が、突然、窓ガラスを割って飛び込んできた。

レイティアに向かって一直線に。

マリンも無言で庇おうとしたが、それよりも顔を覗き込めるほど近くにいたアベルの方が早い。

とっさにアベルは彼女を腕に抱いて庇い、左腕でガラスの破片や木の棒を受け止めた。

「っ」

声にならない声が漏れる。

それは予想外の衝撃を伴ってアベルの左腕を襲った。

シャツが破れ、なにかが露出する。

肌かとだれもが思ったが、それは肌ではなかった。

腕の中に抱き込まれたレイティアはマジマジとそれを見た。

二の腕全体を覆っている、それは黄金の腕輪。

唐草模様を用いていて、幻獣が描かれた華麗な装飾を施された高価な。

孤児院育ちの青年には似つかわしくない品だった。

「これは……」

レイティアの目にも王族でも持てるかどうかの品だとわかる。

思わず腕が伸びた。

触れられて我に返ったアベルが慌てたように身を引く。

「ごめん」

それだけを言ってアベルは部屋に駆け去った。

この腕輪だけは人目に触れないようにしていたので。

その意味はシドニーしか知らない。

あの腕輪は普通の腕輪ではないのだ。

おそらくアベルの身許を証明する唯一の品。

何故ならアベルがこの孤児院に預けられたとき、彼はすでにあの腕輪を身につけていたからだ。

彼が両親の元にいた頃に与えられた。

そう思うべき品。

もしかしたら由緒正しい家柄の子息ではないか。

シドニーはそう疑っていた。

それほど高価な腕輪だったので。

人目に触れないように指示しておいたのもシドニーである。
人目に触れれば騒動になりそうだったので。
「神父様。あの腕輪は？」
レイティアがぼんやりと問いかける。
第一王女であるレイティアでも、ほとんど見かけないほど高価な腕輪。
それをしている者が普通の身分の出身のわけがない。
「申し訳ございませんが、わたしにもわかりかねます」
「では彼がここにくる前から身につけていた？」
「はい。それ以上のことはわかりません。アベルは孤児院に預けられるまで、どこでなにをしていたか、なにも憶えておりませんので」
「そうなのですか。やんごとなきご身分の方とお見受け致しましたが」
「変なこと言わないでっ」
「お姉ちゃん」
はっきりとは見たことはなくても、あの腕輪がそうとう価値のある物だとわかるシスター・エルは震える声を出す。

弟分のアベルが貴族階級の出身かもしれないなんて、彼女には受け入れられないことだったので。

もし事実だとしても捨てられていた時点で関係ない。

それが彼女の意見だった。

「でも、あの腕輪に使われていた紋章。どこかで見たような……」

レティシアも遠くを見る顔になる。

意外な発見にだれもが言葉を失っていた。

第2章　王位継承権の行方（1）

「そうか。レティがそんなことを」

宮廷に戻ってきて1番に父ケルト王に妹姫の現状を報告したレイティアは、玉座に腰掛けた父王が面白そうな顔になるのを黙って見ていた。

「あの娘も大きくなってきていたのだな。わたしも昔などはよく王都に飛び出しては遊んでいたものだ。宮廷で得られるものなど、ほとんどないに等しいからな」

そのお忍びのときに今の妃と出逢い結婚した強者である。

しかし両親から強い反対にあい、ほとんど勘当同然に家を飛び出したという経歴をもつ国王だ。

兄である前王が急死しなければ、たぶん彼が宮廷に戻ってくることはなかっただろう。

王都で慎ましやかに母と暮らしていたと聞いている。

前王が亡くなったとき、跡継ぎがいないという理由から、臣下たちが父を捜し始めたらしい。

しかし野心家がそれを放置するわけもなく、父を名乗る者が5人

も現れたという。

どうやって第二王子だと証明されたのか、レイティアは知らないが。

父が第二王子だと認められた後で、どうして平民である母を王妃として迎え入れたか？

それはそのときにはすでに母と父のあいだには、レイティアたちが生まれていたからだ。

母の出自はともかく父の血を引いているなら、レイティアたちは立派な父の跡継ぎ。

だから、渋々母のことを認めたと聞いている。

そういえば……とレイティアは気になることを思い出した。

「お父さま」

「なんだ？」

「前々から気になっていたのですが、わたしやレティが王位を継ぐに当たって、問題視されていることがあるそうですね？　それは一体なんですか？」

このことは小さい頃から何度も問いかけたが、父から答えが帰ってきたことはなかった。

だから、このときも答えてくれると期待していたわけじゃない。

しかし父は苦笑して答えてくれた。

「そうだな。もうレイも知ってもいい頃だろう。もっと近くに寄りなさい」

父に言われてレイティアは玉座に近づいた。

「王位を継ぐに当たって問題視されているのは……これのせいだ」

そう言って父が左袖をまくり上げた。

そこには見たこともない腕輪がある。

見たこともない……はずなのだが、どうしてだろう？

どこかで同じ感じの物を見たことがあるような気がする。

「これがあったからわたしは行方不明の第二王子だと認めてもらえた。これはな、レイ。第二王位継承者の証だ」

「第二王位継承者の証？　では第一王位継承者の腕輪もあるということですか？」

「そうだ」

「ですがわたしは……」

レイティアにもレティシアにも、そういう腕輪はない。

どういうことなんだろう？

「第二王位継承者までが、この証の腕輪を授けられる。これは当事者が3歳になったときに授けられるんだ。わたしも3歳のときに父上から授けられた。兄上も3歳のときに第一王位継承者の証である腕輪を授けられたと聞いている」

「その第一王位継承者の証の腕輪は今どこに？　伯父様にはお子様がいらっしゃらなかったから、伯父様がしていらしたのですか？」

亡くなるまで前国王である伯父には子供がいなかった。

その場合、世継ぎがいないので、当然だが伯父がしていなければならない。

しかしこの問いには父はかぶりを振った。

「お父さま？」

「不思議なことに兄上はこの腕輪を所持していなかった。この世にひとつしかない腕輪を」

「それはだれかに第一王位継承権を譲った後だったということですか？」

驚愕する。

それではレイティアたちはどうなるのだろう？

「そういうことになるな。兄上はだれかに第一王位継承権を譲った。

それが紛れもない事実だ」

「それでわたしたちの王位継承を認めない臣下がいるのですね」

「第一王位継承権を譲られたのが事実でも、それがだれなのかは不明だし、早急に国王は必要だ。だから、わたしが国王になるのも反対されなかった。

だが、あれから15年。そのときに3歳だったとしたら、最低線で18歳。もしかしたらもう成人しているかもしれない。第一王位継承者はな。だから、臣下たちはレイたちの即位を認めないんだ」

「しかし伯父様にはお子様がいらっしゃらなかったのでしょう？ご自分のお子様以外に王位継承権を譲るなんてこと……あるんでしょうか？」

そこが問題なのだ。

幾ら前王から正式に継承権を譲られていても、血の繋がりがないならそもそも王位は継げない。

血統はなにより重視されるものだからだ。

第2章　王位継承権の行方（2）

「問題はそこなんだ。この腕輪はな、王位直系の血を引いていないと、そもそも受け継げない」

「え？」

「王家直系の血を引く者以外が、この腕輪を身につけようとしたら、全身黒焦げになって死んでしまうんだ」

「それでは？」

「男か女かはわからないが、兄上には子供がいたということだろうな。尤も。兄上の妃だった方は兄上より早くに亡くなられているから、今では確認のしようもないが」

ケルトが宮廷を去った理由のひとつに政争が挙げられる。

当時、宮廷内はかなり荒れていた。

もし兄に子供がいても、その子を派手にお披露目したりはできなかった可能性が高い。

兄の急死も暗殺の噂があるのだ。

徐々に毒を盛られたから死んだという噂はケルトも聞いている。

だから、ケルトは王になってから、国の安定に力を注いだ。

兄が果たせなかった夢を果たしたかったのだ。

あの当時、もしケルトが兄の傍にいたら、兄は死ななくて済んだかもしれない。

それはケルトを今も苦しめている後悔である。

「でも、お父さま。ひとつだけ疑問が」

「なんだ？」

「3歳の頃から、そんなに大きな腕輪をしていたら、失くしたりしませんか？　そもそも身体が大きくなっていくときに困りません？」

首を傾げる娘にケルトは笑う。

「これは魔法の腕輪」

「魔法の腕輪？」

「よく見てみなさい。どこにも留め具がなければ、溶接の跡もないだろう？」

「そう言われてみれば……」

不思議な腕輪だった。

どこにも繋ぎ目がなく、また留め具もない。

どうやって身につけているのか、まるでわからない。

「しかもな？　この腕輪は持ち主の成長に合わせて大きくなるんだ」
「大きく？　まさか」
レイティアが驚いた声をあげると、ケルトは可笑しそうな顔になる。
「事実だ。わたしが授けられた頃は、この腕輪はもっと小さかった、わたしが成長するとそれに合わせて大きくなったんだ」
「信じられない」
「これは継承しようという意志がなければ外せない。次の者に継承するときにだけ取り外しができるんだ。
だから、兄上から腕輪が消えていた以上、継承権を譲るのは兄上の意志だったという証拠になる」
「そういうことですか。それならわたしたちの王位継承が承諾されない理由もわかります。臣下たちにしてみれば、正当な世継ぎは他にいるのでしょうから」
レイティアはため息まじりに呟く。
「しかし今ではだれも見たことがないのでしょう？　第一王位継承権の腕輪は。それでそれらしき物を身につけていたからといって、本物かどうか区別できるのでしょいか？」
「そうだな。判断する材料はやはりその特殊性だろう」

「特殊性？」

「魔法の腕輪だと言っただろう？　幾らそっくりに造っても、同じ特徴を宿す腕輪というのは造れない。本人に譲ろうという意志がなければ取り外しができず、本人の成長に合わせて大きくなり、なおかつどこにも留め具がなく溶接の跡もない腕輪。複製が可能だと思うか？」

「たしかに無理そうですね。お父さまはご覧になったことは？」

「ある。さすがに世継ぎの腕輪というか。それは見事な腕輪で華麗な装飾の施された腕輪だった。あれほどの腕輪は、わたしも持っていないな」

国王でも持てないほど高価な腕輪？

レイティアの脳裏にアベルの顔が浮かんだ。

まさか、とは思う。

たしかに彼のしていた腕輪は孤児院育ちの青年には相応しくない物だ。

だからといってすぐに繋げるのも無理があるだろう。

「お父さまがその腕輪を、わたしたちに譲らなかったのは何故ですか？」

「これを譲ってしまうと、ふたりが第一王位継承者ではないことを証明することになる。それは世継ぎ不在の今、政治的に困るんだ」

たしかに父がしているのは第二王位継承者の腕輪。

それを譲り受けたということは、第一王位継承者、つまり世継ぎではない証拠になる。

それは世継ぎ不在という形になっている現在、政治的に避けた方が無難だ。

正当な王女であるレイティアたちが、第一王位継承権を持っていないとなると、邪な考えを持つ臣下たちが暗躍しないとも限らない。

第2章　王位継承権の行方（3）

「しかしそれではいつまでもお父さまの後継者が決まらないのでは？」

「わたしとしては兄上に本当に子供がいたのなら、その子に王位を譲りたいのだ。レイたちにはすまないが」

父がどれほど今は亡き兄を慕っていたかは、レイティアも知っている。

聡明な国王だったようで、父は兄と対立したくなくて、宮廷を去ったとまで言っていた。

だから、その兄に子供がいたのなら、その子に王位を譲りたいと願うのは、ごく当たり前に思える。

なによりも前王の嫡子なら王位を継ぐ権利がある。

しかしそれはレイティアには歓迎できないことだった。

レイティアは今まで将来、女王になるために頑張ってきた。

妹を巻き込むまいと過保護に育ててきたのも、自分が女王になって妹には苦労をさせまいと思ってきたからだ。

たしかにその重責から解放されるのは嬉しい。

しかしそれが確定してしまうと、これまでの苦労はなんだったの

かと、そう問いたい気分になるのも事実だった。

「そういえばお父さま」

「なんだ、レイ？」

「伯父様って素敵な方だったんですね」

「いきなりどうした？」

苦笑する国王にレイティアは微笑む。

「いえ。レティを迎えに行ったときに、伯父様にそっくりな青年と出逢って。すごく素敵な方だったので、伯父様もとても素敵な方だったのでしょうねと思って」

「兄上にそっくり？」

「そういえばとても見事な腕輪を隠していらっしゃいました。あれほどの腕輪にはお目にかかったことがありません」

「……」

「なんだかご本人は知られたくないご様子でしたが」

「その人は……どこに？　どんな青年だっ！？」

突然、身を乗り出した父王に驚きつつレイティアは答えた。

「孤児院を兼ねた教会に身を寄せておいでですわ。どうも小さい頃

に孤児院に預けられたとかで、ご本人もそれ以前のことは憶えていらっしゃらないようです。院長の神父様がそうおっしゃっていましたから。とても聡明な青年でした」

「歳は？」

「たしか……18だとか。わたしがつい『伯父様？』と呼んでしまったら、まだ18だからおじさんと呼ばれる歳じゃないとかおっしゃっていましたし」

「まさか……」

信じがたいと呟く声に、レイティアは不思議そうに父王を見ていた。

レティシアはあれ以来、孤児院の手伝いをして日々を過ごしていた。

出逢ったときにアベルに問いかけた孤児院の生活を成り立てる方法については、すこししてから理解した。

アベル本人が吟遊詩人として身を粉にして働いて、孤児院や教会の生活を成り立てているのだ。

彼に言わせれば、それがこの歳になるまで育ててくれたシドニー神父への恩返しだという話だった。

アベルの歌声は素晴らしく、ふと耳にしただけで聞き惚れる。

そこまでの腕前を持っていなければ、とても現状維持できなかっただろう。

普通に家庭を支えるのだって大変なのに、アベルが支えている家計は孤児院に教会だ。

普通の稼ぎでなんとかなるわけがない。

それをなんとかしてしまうのがアベルだと、フィーリアが自慢していた。

フィーリアがシスター見習いなんてできるのも、アベルのおかげだと彼女はとても誇らしそうに言っていたものだ。

シスターになるには専門の学校に通わないといけないのだ。

つまりシスターになるにもお金がかかるということである。

それを可能にしているのもアベル、という話になるのだ。

彼がいなければこの孤児院も教会も、そしてフィーリアの将来も、すべて成り立たない。

お金はたしかにないかもしれない。

レティシアからみれば、彼らの食事風景や着ている服などは、とても質素だ。

だが、そこにはお金では買えないものがある。

アベルの人柄を知るほど、レティシアは彼のことが気になりだしていた。

第2章　王位継承権の行方（4）

「エルさんはどうして貴族がキライなんですか？」

教会の掃除をしながら、ふとレティシアは気になっていたことを問いかけた。

一緒に掃除をしていたエルがふと手を休める。

「どうして……ねえ。一言で言えば貴族がいても、なんの役にも立たないからよ」

「でも貴族がいないと、この国は成り立ちません。貴族たちが政を動かしているのだし」

「政で私腹を肥やすのも貴族だしね？」

エルに皮肉を言われてレティシアは黙り込む。

そういう貴族が多いのも事実だったので。

「前王だって貴族たちが暗殺したって専らの噂じゃない。あれほど国のために尽くしてくれた王様を」

「え？　まさか」

まるで知らされていない噂に、レティシアは耳を疑う。

彼女は箱入り娘なので、こういう噂は耳に入らないからだ。

「あたしはまだ子供だったけど、噂でよく聞いたわ。貴族ではなく平民のことを考えてくださる王様を煙たがって、臣下たちが殺したって」

「嘘」

「貴族たちは平民のことなんて、なんとも思ってないの。平民に味方すれば王様だって殺すほどよ？」

信じないとかぶりを振るレティシアに、エルが言い返そうとしたとき、教会の扉が開いて声が響いた。

「エル姉、裏庭の花、摘んでいい？」

「裏庭の花？」

レティシアが呟くとエルは振り向いて笑った。

「またお墓参りに行くの、アベル？」

「ああ。月命日だしさ。好きな酒でも供えてやりたくて。花は必需品だろ？」

「摘んでいいけど丸坊主にはしないでよ？　アベルはすぐにたくさん摘むから」

「わかってるって」

そのまま出ていこうとするアベルの背中に、ここには居ずらかっ

たレティシアは慌てて声を投げた。
「アベルさんっ」
「なに？」
振り向いたアベルが問いかける。
「わたしも行っていいですか？」
必死なその様子とこの場の妙な雰囲気に気づいて、アベルはまた揉めたなと察する。
レティシアの素性には気づいていなくても、薄々貴族だと思っているエルは、彼女とは反りが合わない。
そのせいでレティシアが居ずらくなることが多いのだ。
またそれかと納得して声を出した。
「いいけど。ただの墓参りだから退屈だと思うよ」
「構いません。お墓参りは大切だから。わたしも伯父様や伯母様のお墓参りは欠かさずにやっているし」
「ふうん。だったらおいで。連れていくから」
「ありがとうございます」
明るい笑顔で答えるレティシアがくるのを待って、アベルは出て

いった。

裏庭で花を摘んだアベルは、街の酒場ですこし高級な酒を買うと、街外れに向かって歩き出した。

レティシアが案内されてきたのは小さな墓だった。

墓地にあるのかと思っていたが、墓があったのは街外れの丘の上である。

ポツンと建っている粗末な墓。

刻まれた名はクレイ。

どこかで聞いたような？　と、レティシアは首を傾げる。

「クレイ将軍。アンタが好きな酒を持ってきたよ。飲んでくれよ」

そう言ってアベルが酒をカップに注ぐと墓の前に置いた。

クレイ将軍と言われ、レティシアはようやくどこで聞いたのか思い出した。

数年前に亡くなった近衛隊の将軍だ。

父の警護もやっていた腕の立つ将軍で、父も彼を信頼していた。

どうしてアベルが？

第2章　王位継承権の行方（5）

「レティシアなら知ってるかな。クレイ将軍のこと」

「はい。お知り合いだったんですか？」

「俺を孤児院に預けたのがクレイ将軍らしいんだ」

「え？」

「両親を亡くした俺をクレイ将軍には育てられないという理由で、孤児院に預けてくれたらしい。つまり血の繋がりはないんだ」

「そうだったんですか」

「育てられないのはよくわかるよ。近衛隊の将軍だ。小さな子供を育てている余裕なんてなかっただろうし、クレイ将軍は生涯独身だったから尚更だよな」

「そうですね。お親しかったのですか？」

「あー。剣術は叩き込まれたかな？」

だから、アベルは見かけより逞しいのかと思って、レティシアは赤くなる。

アベルは顔つきだけなら美青年で通るし、荒事とは縁がなさそうだが、実際には少々の戦闘なら軽く勝ってしまうくらいの腕前の持ち主だ。

腕力もあって腕力自慢の男を倒してしまうほど。

初めてそんな一面を目にしたときは、あまりに外見と似合っていないので（おまけに職業は吟遊詩人だし尚更だ）ビックリした覚えがある。

「アベルさんは将軍を慕われていたのですか？」

「……今はね」

「今は？」

「小さい頃は俺の両親を知っているはずのクレイ将軍が、俺にはなにひとつ教えてくれないことで、よく対立していたから」

「アベルさん」

「両親の名を知りたくてケンカになったこともあった。どうして教えてくれないんだって」

アベルの素性を知る唯一の人。

なのに彼はアベルにはなにも教えてくれなかったのだ。

別に大層な望みを持っていたわけじゃない。

ただ普通に両親の名を訊ねただけだ。

亡くなっているのだから知ったところで意味はない。

アベルはそう思って問いただしたが、将軍が教えてくれることは遂になかった。

一時は恨んで反発もした。

でも、将軍は死ぬまでアベルのことは見放さなかった。

「ズルいよなあ。死なれてしまったら、いつまでも恨めない」

「アベルさん」

「今はこれでよかったと思ってる。俺は自分の境遇を不遇だとも不幸だとも思ってないから」

そう言ってアベルは地面に座り込むと竪琴を奏でだした。

クレイ将軍が好きだった歌を歌い出す。

レティシアは目を閉じてその歌声に聞き入った。

娘を連れて馴染みの将軍の墓に向かっていたケルトは、ふと眉を寄せる。

「この歌声は……」

「素敵な歌声。まるで天使のよう」

レイティアはうっとりと目を細める。

「天使、か。兄上が聞いたら、なんて思ったかな」

「どういう意味ですか、お父さま？」

「いや。兄上の歌声にそっくりだから、ついな」

苦笑する父が伯父を思い出していることがわかるので、レイティアは口を噤むしかなかった。

やがて目の前に広がった光景にケルトは息を呑んだ。

「兄上」

若かりし頃の兄がそこにいる。

地面に座り込んで昔よく歌ってくれた歌を歌っている。

「あら？　アベル様……？」

レイティアの呼び声にアベルがふっと顔をあげる。

同時に竪琴の音も消え歌声も途切れた。

「姉様っ。お父さままでっ」

レティシアが驚愕の声を出す。

アベルは慌てて立ち上がった。

「ということは王様？　おいおい。冗談だろ」

呟く声も兄によく似ている。

記憶の中の兄そのままの姿にそのままの声。

歌声まで同じ。

そんな偶然あるのだろうか。

夏だというのに彼は長袖を着ている。

ケルトのように。

汗ばんだその服の下に腕輪らしい物を隠しているのがうっすらと見える。

確かめたい。

そんな衝動に駆られていた。

第2章　王位継承権の行方（6）

「レティ。元気にしていたか？」

アベルを視界に入れながら、ケルトはそう言った。

レティシアは嬉しそうに頷く。

「お父さまはどうしてここへ？」

「クレイに報告したいことがあって墓参りにきたんだが、まさか先客がいるとは思わなかったな。クレイとはどういう関係だ？」

アベルは答えられなかったが、レティシアがさっき聞いたばかりの、彼の生い立ちについて父王に話して聞かせた。

「クレイから本当になにも聞いていないのか？」

「教えてくれなかったんだ。それをどうしろって？」

「いや。嫌味ではないんだが。名は？」

「……アベル」

答えるまでに間が空いたことに気づいて、ケルトはアベルの空色の瞳を覗き込んだ。

「本当の名は別にあるのだろう？」

「……」

「お父さま？」

「どういうことですか？」

娘たちの問いかける声にケルトは、自分の推測を打ち明けた。

「おそらくアベルというのは通称だ。彼には本当の名は別にある」

それはケルトの体験からくる確信だった。

疑っていることが事実なら、彼は自分の本当の名は知っているはずである。

腕輪に刻まれるからだ。

持ち主の名が。

持ち主が代わる度に刻まれる真実の名。

それだけはごまかしがきかない。

アベルはそっぽを向いていたが、レティシアとレイティアの問いかける視線に負けて打ち明けた。

「アルベルト・オリオン・サークル。俺が知っているのはそれだけだ」

名付けからして、やはり普通の身分ではなかったらしいと、レイ

ティアは納得する。

ケルトは今聞いたばかりの名を口の中で繰り返した。

（アルベルト・オリオン・サークル。それが略称だとしたら、おそらく続くのはディアン。正式名はアルベルト・オリオン・サークル・ディアン）

世継ぎはサードまで名付けられるのが決まり。

彼の名付けが、それに従っているとしたら間違いない。

彼は兄の、前王の世継ぎなのだ。

後は腕輪を確認できれば動きようもあるのだが。

「何故名を隠していた？」

「平民には聞こえない名付けだし、普段名乗るには目立ちすぎるからって……クレイ将軍がアベルと名乗れって」

（つまりクレイは知っていたわけだ。彼が兄上の子であると。いや。もしや世継ぎと承知で王都に匿ったのか？　彼を護るために）

孤児院に預けたのも、その後何度も様子を見にきていたのも、そして何度問われても両親の名を教えられなかったのも、彼が兄王の子だとしたら不思議ではないのだ。

彼が孤児院に引き取られたのが１５年前だとすると、当時はケルトが即位したばかりだが、前王は賢王で知られていたので、その名

が知られていないということは考えられない。

つまり素性を知らずに育っていようと、彼には両親の名は言えないということになるのだ。

言ってしまえばそれが前国王であると彼にもわかるだろうから。

彼が育ってきた背景はすべて彼が生来の世継ぎであることを示している。

まさか彼を預けたのがクレイ将軍だとは。

謀叛と受け取るのは簡単だが、この場合、兄に忠誠を誓っていたクレイ将軍だ。

彼の身を護るために匿ったと見るべきだろう。

そのくらい当時の政争はひどかったから。

3歳の幼子など簡単に殺されてしまう。

なにしろ彼は賢王と言われた前王の嫡男。

その血筋の正統性と父王の偉大さ故に、彼を疎ましく思う者はきっと少なくない。

（3歳か。幼いな。そんなに幼ければ街に避難させるのも無理はない。クレイらしいというべきか）

堅物と言われていたクレイは、王家に対する血筋も半端ではなく、

それ故にケルトも彼を信頼し身辺警護を任せていたくらいだ。
それだけに兄王の子供の存在を隠していたのが事実なら、感心もするが反面、教えてほしかったとも思う。
すべてを墓の中に持っていくのは、やはり反則だと感じてしまうものだ。
もしだれも気づかなかったら、どうするつもりだったのだろう？
この現状ならその確率も高かっただろうに。
「レイから聞いたが、それは見事な腕輪をしているそうだな？」
突っ込まれたくないことを突っ込まれ、アベルは答えに詰まる。
「わたしですら持てないだろうという腕輪に興味がある。一度見せてはくれまいか？」
「……悪いけどこの腕輪は人様にお見せするような代物ではないんです。王様のご命令でも従えない」
そっぽを向いたまま、アベルは素っ気なく言い放つ。

第2章　王位継承権の行方（7）

その様子はケルトには兄王に似てみえた。

兄王も優しげな容貌に似合わず、一度言い出したら退かない一面があった。

顔立ちだけではなく、彼は真実の意味で兄王に似ているらしい。

そう思うだけで嬉しくなる。

時が逆流して兄と逢っているようで。

「王として無理強いしたいわけじゃない。だが、意味もなく見せろと言っているわけでもないんだ。ここはわたしの言うことを素直に聞いてくれないか？　王として無理強いはしたくないからな」

「どうしてそんなに俺の腕輪なんかに興味があるんだ？」

「では訊くがだれから譲り受けた腕輪か、それともどこでどうやって買った腕輪か、そなたに説明できるのか？」

「それは」

言葉に詰まる様子を見て、ケルトはやはり彼にも覚えのない頃から、所持しているのだと見抜けた。

だから、手に入れた過程や謂れを訊ねられても答えられない。

そういうことなのだろう。

そして疑っていることが真実なら、腕輪が普通の品ではないことは彼も承知しているはず。

だから、尚更答えられないのだろう。

「もしかすると普通の腕輪ではないのではないか？」

この問いにも彼は答えない。

ただ頑なに顔を背けているだけで。

「とにかく見せてもらう」

同意をもらうのを諦めて彼に近づこうとしたら、彼は警戒するように身を遠ざけた。

「わたしが王であることは、そなたも理解しているはずだ。逆らっても意味がないとは思わないのか？」

「いやがっているのを無理に確認することが王様のやり方なのか？」

嫌悪を瞳に浮かべて彼が言う。

兄そっくりの顔で、そんな表情をされるのは、さすがに堪えた。

娘たちも心配そうに見ているので、黙って左袖をまくりあげた。

「まあ驚いた。お父さまも腕輪をなさっていたのですね」

レティシアがそう言えば、これまで自分たちにすら秘密にしていた父が、急にそれを明かしたことで、レイティアは怪訝な気持ちになる。

アベルも自分の腕輪とよく似た腕輪を見て息を飲んだ。

「このとおりわたしも腕輪をしている。この腕輪と対になった腕輪をわたしもずっと探していたのだ。

レイティアから話を聞いて、そなたのしている腕輪こそが、そうではないのかと疑っている。

だから、確認したい。協力してくれないか？　そなたにとっても悪い話ではないはずだ」

「まさかお父さま……彼がそうだと疑っていらしたのですか？」

レイティアが驚いた声を出す。

「まだ確信があるわけじゃない。ただ彼の容姿と持っている腕輪。その類似点がどうにも気になる。わたしの思い過ごしなら、彼には迷惑な話かもしれないが」

見えない話にアベルは眉をひそめる。

「なんの話をしてるんだ？」

「詳しい事情を知りたければ腕輪を見せてくれ。思い過ごしの可能性がある以上、今はなにも言えない」

ケルト王は真剣なようだった。

アベルは一度は見せようかと思ったが、もしケルト王の疑惑が当たっていたら、自分の平穏な暮らしを根底から崩されそうだと気づいて、最終的には思い止まった。

いつまで経っても腕を差し出さない彼にケルトは不安になる。

誠心誠意を尽くしたつもりだが、彼には通じていないのだろうが、と。

「アルベルト？」

彼の本名らしい名を呼んでみる。

だが、彼は違うというようにかぶりを振ってみせた。

「俺はアベルだ。アルベルトじゃない」

そのまま背を向けようとする彼にケルトは慌てて声を投げた。

「真実から逃げ出すのか？　真実の自分から」

「王様がなにを知っているのかは知らない。でも、俺はアベルのままでいたいんだ。俺の平穏な暮らしを壊さないでくれ」

「偽りの平穏だ」

冷たく言い返されてアベルが立ち止まる。

しかし振り向くことはなかった。

「そなたが真実わたしが疑っている素性の者なら、そなたにはそなたにしかできないことがある。それから逃げ出して偽りの平穏に浸っている。
そなたの両親はそれを喜ぶだろうか？　その腕輪がわたしの知っている腕輪なら、そなたにそれを譲ったそなたの両親は、決してそんなことは望んでいない」

顔も名前も存在すら知らない両親の名を出されて、アベルは理不尽な怒りに支配された。

「子供を捨てた親がなにを望むって？　そんなものに応える義務は俺にはないね」

「捨てたわけではない！！」

感情的に言い返してきたケルト王にアベルがようやく振り向いた。

「生きたくても生きられなかった苦しみを、大事な子供をおいて死ななければならない辛さを、そなたがわからずにだれがわかってやるのだっ！？」

「まるで俺の両親がだれなのか知っているみたいな口振りだな」

「確実な話ではないかもしれない。だが、その腕輪がわたしの知っている腕輪なら、そなたの両親のことは、わたしがだれよりも知っている」

アベルの両親を国王が知っている。

アベルの両親はそういう身分の人なのか？

「そなたにそなたの両親のことを話してやりたい。だから、そなたがしているという腕輪を見せてくれないだろうか」

会釈程度ではあったが、ケルト王はたしかに頭を下げた。

そのことにアベルだけでなく、彼の娘たちまで驚く。

「頼むから見せてほしい。そなたがしているという腕輪を。人違いなのか本人なのか、わからないままでいるのは、わたしにとっても辛いのだ」

「「お父さま」」

ふたりの驚く声を聞きながら、アベルは諦めて元の位置に戻った。

このまま無視して孤児院に帰ったら、ものすごく後味悪そうだったので。

「これでいいのか？」

アベルはそう言って左袖をまくりあげた。

二の腕を覆うほどに大きな腕輪があらわになる。

唐草模様を用いていて幻獣を刻み込まれた華麗な腕輪。

それに使用されている紋章は、ケルトには見慣れたものだった。

代々の国王だけが受け継ぐ紋章。

元々が第二王子であったがために、ケルトには受け継げなかった正当な王家の紋章。

「ああっ。やはりっ」

感極まってケルトの瞳に涙が浮かぶ。

「あの……？」

アベルが強ばった声を出したとき、ケルト王の両腕がアベルの身体を包み込んだ。

「アルベルト。よく……よく生きていてくれた！！」

震える腕に抱かれながら、アベルは困った顔を向けていた。

第3章　知らなかった事実（1）

詳しい事情を話したいから……と、アベルは半ば強引に弧児院に案内させられていた。

涙まで浮かべて感激してみせた王様は、何故か感激が収まると急に笑顔になり、戸惑うアベルやレティシアたちを連れて、半ば強引に弧児院に案内させたのだ。

最初は尤もらしい理由を使っていた。

曰く、

「レティシアがどんなところで働いているか興味がある。案内してくれないか？」

という話で当のレティシアが恥ずかしいからこないで、と拒絶するとなぜか今度はレイティアに同意を求めた。

「レイだってレティがどういうところで働いているか興味があるだろう？」

とかなんとか同意を得ようとする始末。

レイティアはレティシアを預けるとき、貴族に偏見がありそうなシスター・エルを思い出して、このときの父の言葉にはこう答えた。

「でも、せっかくレティが自立しようと自分ひとりで頑張っているんですもの。お父さまが顔を出さない方がいいわ。子供の仕事場に親が顔を出すのは、あまり好かれませんから。レティが親離れできていないと思われますわ」

ふたりの娘に揃って反論された王様は、それはそれは拗ねてみせた。

ブツブツブツと愚痴りつづけ、それでも認めてもらえそうにないと悟ると、ついに開き直ってこう言った。

「……わたしはアルベルトが、アルが育った場所を見たいんだ。そんなに邪険にしなくても……」

大の大人がそれも一国の王様が、子供たちにつれなくされたと拗ねるのだ。

アベルは呆れてしまって、なんでもお好きにどうぞ、といった気分になった。

娘ふたりはまだ納得していない風情立ったが、問題の当事者であるアベルが投げやりとはいえ認めてしまったので、仕方なく父親のワガママを受け入れた。

そうして現在、４人は弧児院の前にいる。

「ふうむ。ここがアルが育った場所か。なかなかに風情のある建物だ」

「はっきり言っていいよ、オンボロだって」

アベルがそういうとケルト王は困った顔になり、やがて諦めたのか堂々とこう言った。

「言ったら悪いかもしれないが、確かに貧相な建物だ。これで嵐に耐えられるのか？」

この國は火山はないし地震も滅多にないが、そのかわりといってはなんだか、実は台風やハリケーンなどが多いのだ。

それに海も近いので洪水や津波も多い。

この国に住んでいれば当然だが、それらに備えなくてはならない。

アベルの育った弧児院は、そういう意味でいつも問題を抱えていた。

それをなんとかしていたのもアベルである。

「お父さま、アベルさんってすごいのよ？」

「ふむふむ。どうすごいのだ、レティ？」

「嵐に備えて孤児院や教会を修繕するお金も、すべてアベルさんが用立てているの」

「ほう。それはすごい。一体どうやって？　かなりの額になるのだろう？」

ケルトも王なので実際のところ、金銭的なことには疎いのだが、これだけ大きな建物なら修繕などでかなりの金額が必要なことは想像がつく。

もしやクレイが彼に遺産でも遺したのかと思ったが、レティシアの説明は意外なものだった。

「アベルさんってとても優れた吟遊詩人なの。孤児院や教会の維持費も日々の生活費もすべてアベルさんが用立てているのよ。どう？　すごいでしょう？」

「それは……今彼がいなくなると、ここに住む人々は生活に困窮するということか？」

困惑気味の声にレティシアはため息をつく。

「この教会のシスター・エルは、とても貴族をきらっていて、寄付金なども受け取らないそうなの。そのせいでいつも困窮していた生活を立て直したのがアベルさんらしいのよ。いなくなったら困窮するどころではないでしょうね、きっと」

それは遠回しに餓死の可能性もあると言っているのと同じだった。

まさかそんなこととは思ってもいなかったケルトは言葉を失う。

（わたしのやろうとしていることが、まさかそんな意味を持っていたとはな。だが、現実に彼はもうここにはいられない。それとも今動き出すには時期尚早ということなのか？　今彼に事実を打ち明けても受け入れない気がする）

ケルトが彼を見るとアベルはなにか言いたげな顔でこちらを見ていた。

（やっぱりケルト王は、俺の生活を根底から変えかねない秘密を知っているのか？　だから、今その話を聞いて顔色が変わった？）

問うには怖い問いを胸にアベルは孤児院の中へと入った。

その後をケルト王が娘たちを連れて入っていく。

（うーん。本当に貧相だ。彼がここで育ったというのは将来的には助かるのだろうが、わたしとしてはあまり歓迎できないな。王としては喜ばしいことだが）

これからのためには役に立つ得難い経験だ。

だが、個人的にはやはり喜べない。

孤児院の中に入ってすぐにアベルを呼ぶ幼い声が聞こえてきた。

「おかえりなさい、お兄ちゃんっ！！」

「ただいま、フィーリア」

当然のように頭をなでるアベルに、ケルトは首を傾げる。

第3章　知らなかった事実（2）

「彼には妹がいるのか？　いや。だが」

「アベルさんの孤児院仲間みたいな関係よ、お父さま。本当の兄妹ではないわ」

「そうなのか」

「孤児院で育つと年上のことは兄、姉と呼ぶようね。それと同じように年上の者も年下の者を実の弟や妹として扱う。そういうことらしいわ、お父さま」

ふたりの娘からの説明にケルトは複雑な気分になる。

実の兄妹のように振る舞うふたり。

だが、その関係を自分が壊すのだ。

そう思うと罪悪感が沸く。

「お客さんを連れてきたの？　ひとりはこのあいだきたレティさんのお姉さんだよね？　もうひとりのおじさんは？」

フィーリアにおじさんと呼ばれ、ケルトがイジける。

そんな王をチラリと見て、アベルはフィーリアに笑ってみせた。

「ふたりの父さんだよ。レティがどうやって働いているか知りたい

から。そう言われて連れてきたんだ」

「ふうん。お兄ちゃんって本当に顔が広いよね。驚いちゃう」

「エル姉は？」

「教会だよ。懺悔にだれかきたみたいで、しばらく近づかないでって」

「へえ。最近多いよな、懺悔」

前はそれほどでもなかったが、最近特に増えた気がする。

エル姉に訊いても大したことじゃないからとしか言わないけど。

「アル。そろそろそなたの部屋に案内してくれないか？」

「ホントにそれしか用事がないんだな、アンタ」

呆れたように言ってアベルは3人を連れていこうとしたが、説明と違う行動にフィーリアは疑問を抱いたようだった。

通り過ぎようとした4人を振り返る。

「お兄ちゃん」

「なんだよ？」

振り向いたアベルが問いかける。

まっすぐなフィーリアの視線がアベルを貫いた。

ちょっと息を飲む。

「アルってもしかしてお兄ちゃんのこと？　どうしてレティさんたちのお父さんが、お兄ちゃんの部屋に行きたがるの？」

「俺がレティの部屋には行けないって言ったからだよ。今はレティはフィーリアと同室だろ？　それで俺が立ち入りは遠慮してくれって言ったんだ」

「そんなこと気にしなくていいのに」

「でも、フィーリアの私的空間だから、できるだけそっとしておいてやりたかったんだ。それで孤児院にきたら、俺の部屋に案内することになっててさ」

「部屋のことはわかったけど、お兄ちゃんをアルって呼ぶのはなんで？　お兄ちゃんはアベルだよ？」

アベルはここにきた当初こそ、自分のことは「アルベルトだよ」と名乗っていたが、すぐにクレイ将軍に諌められていた。

そのおかげで実際にアベルが自分のことを「アルベルト」と名乗っていたことを知っているのは今ではシドニー神父くらいだ。

シスター・エルはその頃はまだ健在だった両親と一緒に住んでいて、この教会にはシスターの勉強を兼ねてくるくらいだったので、当然だがアベルがそう名乗ったことは知らない。

知っていたらアベルへの態度は、最初は絶対にぎこちなかっただろう。

さて。

どう答えようかと思っていると、ケルト王が自然な態度で口を挟んできた。

「本当はアベルという名なんだろう？　だが、アベルという名のいとこがわたしにいてな。それでアルと呼んでいいかと本人に訊ねたら許可が出たというわけだ」

「ふうん」

フィーリアは納得したものの不満そうな顔だ。

それなら理由として理解できるが、アベルに対して失礼だと思ったから。

いくら同じ名のいとこがいても、それでアベルの名を変えようとするなんて横暴だ。

そんな感想を読み取ってくれたのか、アベルが頭を撫でてくれた。

「そんな顔するなよ、フィーリア。俺は気にしていないんだから」

「でも」

「それに俺は別にアルでもいいんだよ」

「どうして？」

「俺は昔はアルと呼ばれていたらしいから」

「お兄ちゃん？」

フィーリアの怪訝そうな顔にアベルはやるせない顔で笑う。

第3章　知らなかった事実（3）

「アベルって名はさ。俺をここに連れてきてくれた人が名付けてくれた名前で、俺の本名じゃないんだよ」

「嘘。じゃあお兄ちゃんの本名って？」

「ごめん。それについては言いたくない。いつか言ってもいいと思えたら、フィーリアやエル姉には1番に教えるから。だから、今は知らないフリをしてくれよ」

「お兄ちゃん」

呆然としているフィーリアを置いて、アベルは3人を引き連れて部屋へと移動した。

アベルの部屋は大黒柱だけあってか、個室でわりと立派な部屋だった。

だが、それはあくまでも外観から見てという意味だ。

通されたケルトはすこし複雑な声を投げた。

「せっかくわたしがごまかしたのに言ってもよかったのか、アル？」

「いつかは言わなくちゃいけなかったことだ。俺がフィーリアたち

を騙しているのは事実だからな」

「だが」

「お父さま。そのことではアベルさんが1番考えているはずよ。そのくらいにしてあげて」

レティシアに取りなされてケルトは渋々諦めた。

「それで？　詳しい事情って？」

寝台に腰掛けたアベルに言われ、部屋に4つしかない椅子を勧められたケルトたちは、勧められるままに腰掛けると話し出した。

「まずそなたの名付けについて」

「名付け？」

首を傾げるアベルにケルトは頷いた。

「おそらくそなたのアルベルト・オリオン・サークルというのは略称だ」

「略称」

「この国ではそういう名付けをされる人物というのはただひとりしかいない」

「どういうこと？　お父さま？」

首を傾げるレティシアに姉であるレイティアが話し掛けた。
「今は黙って聞いていて、レティ」
「姉様は知っているの？」
「このあいだレティをを連れ戻しにきたときに、宮廷に戻ってからお父さまから伺ったわ」
レティシアは黙ってアベルの顔を見る。
強ばった彼の顔を。
「ファースト・セカンド・サードと続く名付け。そなたの名付けはそれを意味している」
「そんなの……サークルが苗字かもしれないじゃないか」
「そなたはわたしが国王だと忘れていないか？　この国に住む人々の苗字はすべて把握している。サークルという苗字はないのだ」
サークルという苗字はないと言われ一度言葉に詰まったが、アベルはすぐに思いなおして言い返した。
「だったらよその国から流れ者かもしれないし。その場合サークルという苗字でもおかしくないだろう？」
「それはありえないな」
「どうして……」

「そなたの容姿だ」

「容姿？」

アベルは意外なことを指摘され、今度こそ言葉に詰まった。

（容姿？）

「わたしはな、王家の直系として他国の血はいっさい混じっていない。それは前王だった兄上にもいえるのだ」

「……」

レイティアからアベルが前王そっくりだと言われたことを思い出してアベルの顔がますます白くなる。

「兄上は紛れもないこの国特有の顔立ちの持ち主だった。その兄上とそっくり同じ顔をしていながら他国の血を引いている？　それどころか他国からの流れ者？　ありえぬな」

前王にそっくりだということは、アベルの身にはこの国の人間以外の血は流れていないことを意味する。

そう言われてアベルは言い返す言葉を探していた。

このままでは思わぬ形で自分の出自を証明されそうで。

だが、どうしても言い返すべき言葉が浮かばない。

この国でたったひとりにしか名付けられない名付け。

それが普通の意味ではないことは、アベルにもよくわかるので。

「この国でたったひとりだけサードまで名付けられる人物がいる。言っておくがわたしの名付けられた名はセカンドまでだ」

この言葉にはアベルは瞳を見開いた。

国王よりも長い名前？

ありえないと内心で動揺している。

顔には出していないけれども。

第3章　知らなかった事実（4）

「前例はわたしが知っているかぎりでは、そうだな。そなたよりも以前はただひとり。その人より以前を逆上ればもっといるが」

「そんなにいるんなら別に特別な名前じゃないだろ」

言い返すアベルの声は震えていた。

その動揺を見抜いてケルトはため息を漏らす。

「言っただろう？　この国でそう名付けられるべき人物はただひとり、と。つまりひとつの家系図でひとつの世代につきひとり、という意味だ。言い換えればそなたより以前に名付けられていた者は、そなたよりも以前の世代。つまり前代。そなたは当代。それ以前となると前々代とかそういう意味になる」

「ひとつの家系図でってことは、他の家系図にもいるんじゃ……」

「ああ。言い方が悪かったな。この国に存在するすべての家系図の中で、たったひとつの家系図でひとつの世代につきひとり、だ。つまりその家系図以外は実在しない」

「……」

聞けば聞くほど普通の意味には聞こえなくて、アベルは息を殺す。

なんだか聞きたくない現実を聞くような気がして。

「アルベルト。そなたの正式名をわたしは知っている。アルベルト・オリオン・サークル……ディアン」

アベルとレティシアの瞳が見開かれた。

「「ディアン？　それって……」」

「そう。そなたの正式名はアルベルト・オリオン・サークル・ディアン。このディアン王国の正当な世継ぎの君だ」

「嘘だ……」

アベルは震えて頭を抱え込んだ。

「王家の代々の世継ぎのみが、サードまで名付けられる。国王の家系しかも第一子にしか受け継がれない名付けなのだ。従ってそなたより前にそう名付けられていたのはわたしの兄上。つまり前王だ」

「……信じらんない」

「アルベルト。そなたはわたしの兄上が残した唯一の忘れ形見。この国の正当な跡継ぎなのだ」

「そんなの俺は望んでいないっ！！　それにそんな証拠がどこにあるんだっ！？　俺自身、自分の出自は憶えていないのにっ！！」

とっさに感情的に言い返したアベルに、ケルトは子供を言い聞かせるような顔をした。

「そなたのしている腕輪が証拠だ」

ビクリとアベルの身体が震えた。

無意識に服の下にある腕輪を隠すような仕種をしてしまう。

「そなたのしている腕輪こそが、第一王位継承者の腕輪。つまりその腕輪の所有者こそが、第一王位継承権を持っていることを証明しているのだ」

「そんなの他のだれが信じるっていうんだ？」

「わたしが信じさせてみせる。それにすこしでもわたしの腕輪について知っている臣下なら、その腕輪を前にしたら信じざるを得ない。何故なら第一王位継承者の腕輪も、わたしの所持している第二王位継承者の腕輪と同じく普通の腕輪ではないからだ」

これについてはアベルは答えなかった。

肯定も否定もしなかったのである。

「そなたはその腕輪を外したことがあるか？」

「……あるに決まってるだろ。風呂とかどうするんだよ？」

「だったら今外してみせてくれ」

こう言い返されるのはわかっていたのか、ケルトは即座にそう言った。

アベルはなにも言い返さない。

「できないだろう？」

優しい声にアベルは顔を背けた。

「その腕輪がどういう腕輪なのか、どういう仕組みになっているのか、なにも知らないそなたには外せないはずだ。わたしも生涯に一度しか外す気はないしな」

「え？　外せるのか、これ？」

つい驚いた声を出してしまい、アベルは暴露してしまった。

自分には外せない、と。

それに気づかないくらい驚いているらしいアベルにケルトは苦笑する。

「外せる。生涯に一度だけな」

「嘘だろ」

「そなたはまだその条件を満たしていない。だから、外せないのだ。それにそなたは条件そのものを知らない。それで外せるわけもないだろう」

これでうっかり暴露したことに気づいたアベルは慌てて口を噤んだ。

「その条件を今教える気はない」

「なんで……」

「そなたは今は条件を満たしていないから、教えてもいいような気もするが、条件を満たそうとして、不本意な行動に出る可能性も無ではないからな。だから、教えない」

「その心配はいらないんじゃないかしら？」

「レイ」

父の呼び声にレイティアは、自分なりに調べたアベルの人柄を思い出しながら答えた。

第3章　知らなかった事実（5）

「アベル様。いえ。アル従兄さまと言うべきかしら？　アル従兄さまはそういう行動には出ないと思うわ。自分が認めたくない境遇に追い込むような真似、アル従兄さまにはできないと思うのよ。わたしの調べた情報ではアル従兄さまってそういう人よ？」

「ごめんなさい。お話が見えないの。どういう意味なの？」

首を傾げるレティシアを見て、ケルトは覚悟を決めた。

それほどレイティアを信じていたということである。

「腕輪が外れる条件はただひとつ」

アベルは食い入るようにケルトの顔を見た。

「国王に子供が産まれ、その第一子が3歳になったとき、初めて王位を継承する条件が成立したことになる。そのときに時の国王が、我が子こそ後の王と認めた場合に限り、つまり王位を継承させてもいいと判断したときにだけ腕輪は外れる。第一王位継承権を3歳になった我が子に譲ることで」

自分に子供ができて、その子が3歳になると王位を継承することが許される？

それはアベルが自分の子に重責を押し付けるということだ。

国王として正式に子供を得て、その子に将来、王位を譲ってもい

いと思えたなら、そういうこともいいかもしれない。

だが、レイティアの言ったように、自分が楽になるためにその手を使うのは……どうもアベルにはできないようだった。

「よく思い出してみるんだ。そなたがこの孤児院に預けられた当時、そなたはすでに3歳になっていたはずだ」

たしかにアベルがこの孤児院に預けられたのは3歳のときである。

そのとき、すでにこの腕輪をしていたらしいから、ケルト王の言っている条件は満たしていることになる。

前王がアベルに王位を譲ってもいいと思ったから、亡くなる前に前王からアベルへと王位は継承されていた。

そういうことなのだろう。

「言っておくが自分の子でもない子供に、自分の子と偽って王位を譲ろうとしたり、もしくは自分の子以外の子に王位を譲りたいと思うようなことは慎んだ方がいい」

「どうして？」

「お父さまから伺ったお話では、第一王位継承権の腕輪も、第二王位継承権を意味する腕輪も、王家直系の者しか身につけられないのだそうです」

「え？」

「もし王家直系の血を引く者以外が身につけると、全身黒焦げになって死んでしまうのだとか」

それはアベルがこの腕輪を譲る相手は、直接アベルの血を引いた子供でなければならないということだ。

自分の子供以外に譲ろうとしたら、その子は黒焦げになって死んでしまう。

アベルが殺すのだ。

それは……できない。

その方法を検討していたアベルは眼を伏せた。

「さてはその方法を検討していたな？」

瞳を覗き込まれてアベルはとっさに顔を背ける。

ケルトは大きなため息をついた。

「そんなに国王になるのがいやなのか？」

「いやだとかいやじゃないてか、そういうレベルですらない。俺はアベルなんだ。今更実は前王の子供でしたとか、あなたは世継ぎなので国王になってくださいなんて言われても頷けるわけがないだろ。第一」

「第一？」

「俺がそれを受け入れたらレイたちはどうなるんだ？　ふたりともアンタの娘として、将来女王になるために頑張ってきたんじゃないのか？」

この言葉にはレイティアとレティシアが顔を見合わせた。

しかしなにも言い返しはしない。

ふたりとも王家の王女である。

自分たちよりも由緒正しい血筋の者が現れたら、その人が王位を継ぐべきだと思うから。

「国王になるためになにも勉強してこなかった俺より、女王になるために頑張ってきたふたりの方が王位を継ぐべきだろ。腕輪になんて拘らなくても」

「それはできないのだ、アルベルト」

言いかけたことを遮られて、アベルは不満を瞳に出す。

そんな甥にケルトは苦笑した。

「王位継承の腕輪は正当な物なのだ。それを無視して王位は継げない。その証拠にふたりの即位を臣下たちが認めていないのだ」

「え？」

驚いてふたりを見ると、ふたりは苦い笑みを浮かべていた。

「ふたりが第一王位継承権を意味する腕輪を受け継いでいないから、臣下たちはふたりが即位することを認めない。逆から言えば、だ。そなたはその腕輪をしているだけで即位ができる」

「そんなバカな」

そんな理不尽なことがあっていいのかとアベルは思う。

だが、ケルトたち親娘は至って真面目な顔をしていた。

彼らにとっては当たり前の事実らしい。

第3章　知らなかった事実（6）

「それに国王になるための勉強ならこれからできるし、政とは王ひとりで行うものでもない。優秀な臣下たちをわたしが育んでおいたから、そなたはなんの心配もいらない。それにわたしもそなたが王として一人前になるまでは譲位する気もないし」

理路整然と言い立てられてアベルは言葉を失う。

そこにはどこにもアベルの意志がない。

それにあまりにレイティアやレティシアに悪い。

いきなり出てきたアベルが、ふたりからすべてを奪うなんて。

「ふたりのことを考えてくれるのか？　だが、ふたりの問題はおそらくそなたにも降りかかるだろう」

「どういう意味なんだ？」

「つまり、だ。本来そなたが王位を継ぐべき場面で、臨時とはいえわたしが継いでしまったせいで、レイたちは王女を名乗っているわけだ。そこへ正当な王位継承権を持つそなたが出てきた場合、臣下たちはおそらくふたりのうち、どちらかとの婚約を進言してくるだろう」

「「「婚約っ！！」」」

3人の声がひっくり返る。

そんな3人にケルトは可笑しそうに笑う。

「ふたりは同等の王位継承権を持っている。おそらくそなたと婚約する方に、わたしはこの腕輪を譲ることになるだろうな」

「第二王位継承権の腕輪、か」

アベルはまだ赤い顔のまま唸る。

そんなこといきなり言われても困る。

それはまあふたりは可愛いが、それとこれとは別である。

結婚相手くらい自分で決めたいし、なによりも恋愛くらい自由にしたい。

これまでは可能だったことが、ケルト王の意見を受け入れると叶わないなんて、やはり認められないとアベルは思う。

なによりも今アベルがいなくなったら、この孤児院や教会はどうなるか。

それを思うとどうしても頷けないのだ。

それにアベルがこの孤児院に預けられた経緯も不明なままだし。

「俺はアベルだ」

「アルベルト」

「「アル従兄さま」」

「王位継承なんてくそ食らえだっ」

そこまで言ってアベルはそっぽを向いた。

やはりこうなったかとケルトは顔をしかめる。

彼の境遇や現在立たされている立場を思えば、素直に認めない気はしたのだ。

まだここまで素直に説明に耳を傾けてくれただけマシな方だろう。

説明の途中で追い出される覚悟もしていたし。

「まあ、いい。時間はまだたっぷりある。これからそなたを説得していけば済む話だ」

「いくら説得されても俺の答えは同じだ。王位なんて継がないし、そんなこと知ったことじゃない」

「そなたが真実、兄上の子供なら、いつまでもそんなことは言っていられなくなる」

「勝手に決めつけないでくれ」

「いや。兄上の子だからこそ、今素直に受け入れないのだろう。それがわかるからわたしは気長に説得するつもりだ」

諦めないという意思表示にアベルは迷惑そうにケルトを見る。

内心では兄の子が生きていたことを知ったときの、ケルトの様子を思い出して胸が痛かったけれど。

ケルト王の好意は本物だ。

わかるからアベルは迷惑そうな顔を崩すことができなかった。

自分が育った孤児院や教会に住む家族のために。

そして自分のせいですべてを失い、結婚まで左右されるかもしれないレイティアやレティシアのために。

「どうしてレイ様までがここにいるの？」

刺々しく文句を言ってくるのはマリンだ。

まあそれも当然だろう。

護衛対象がいきなりふたりになったのだ。

女の身で護衛騎士なんてやっているマリンにとってはいい迷惑だろうから。

責められたアベルは食事の席で肩を竦めてみせる。

国王がお忍びでここにきたことはマリンも知っている。
フィーリアからレティシアの父親がきたと知らされたからだ。
そのときマリンはちょうど国王への報告のため、宮殿に戻っていたので留守だったのはそのせいかと呆れたが。
が、何故かそれ以来レイティアもここにいるのだ。
アベルに訊いてもレイティアたちに訊いても埒があかない。
マリンが怒るのは自分はふたりの王女の専任護衛騎士なのに、この事態についてなにも詳しいことを知らされていないからである。

第3章　知らなかった事実（7）

国王が戻ってくるのをじっと城で待っていたマリンが言われたのも、「レイティアは孤児院にいる。悪いがふたりの護衛をよろしく頼む」という内容だった。

事情はなにも聞いていない。

どうしてレイティアまで孤児院に行かせたのか。

マリンは王に問いかけたが、それについて返ってきたのは「秘密だ」という、楽しげな王の声だけだった。

事後承諾というこの状況が気に入らない。

おまけに1番気に入らないのは、どうやらアベルは詳しい事情を知っていそうだと読み取れることにあった。

何故ならレイティアが滞在することについて、唯一疑問視をぶつけなかったのがアベルだからだ。

アベルはこの件について問われると、ただ困ったような顔で肩を竦める。

それが気に入らないのだ。

「そう睨むなよ、マリン。俺だってあの人にレイは連れて帰れって言ったんだ」

「アベルはそんな恐れ多いことを言ったの！？」

驚愕するマリンに「やっぱり宮仕えしていると、こういう反応だよなあ」とアベルは内心で呆れる。

それを思えば自分は初対面から、ずいぶんな態度だったかもしれない。

それでもケルトが怒らなかったのは、おそらく甥ではないかと疑っていたせいだろう。

愛されていることを疑いはしないけれども、この状況は正直嬉しくなかった。

マリンはぶつぶつと怒っているが、１番怒りたいのは実はアベルなのだ。

なにしろ、あの規格外の王様は城へと戻るときにこう言い置いたのだ。

『そなたの言い分はわかった。だが、わたしの言っていることが紛れもない事実であることは確認済だ。いずれ間違いなくそなたとレイたちとの婚姻についての問題は持ち上がるだろう』

これについてアベルは「勝手に決めつけるなっ！！」と怒ったが、アベルの怒りなど怖くもない王様はシレッと言ってのけた。

『レティシアはここにいるからいいとしても、レイティアと全く面識をもてない現状はさすがに困るだろう？』

「困るわけないっ！！」とアベルは言い切ったが、唯我独尊の王様はサラリと無視した。

『そなたが自由に結婚相手を選べるように、レイティアもしばらくここに滞在させよう』

ふたりのあいだから結婚相手を選ぶことを前提にしている王様に、アベルは思わず「それって自由っていうのか？」と突っ込んだが、これも見事に無視された。

あまりに自由意志を無視されるので、アベルは帰城しようとしていた彼を捕まえて訊いてみた。

『アンタ。自分の娘を政略結婚させるのに全く疑問を抱かないのか？』と。

するとケルト王は振り返り、それは嬉しそうに笑った。

『他の貴族の子弟が相手だったならお断りだな』

『だったらっ』

『だが、相手がそなたであれば否やはない』

あのとき、眩しいほどの笑顔で断言され、アベルはついに言い返せなかった。

『むしろ兄上の唯一の忘れ形見であるそなたを他の貴族の令嬢に奪われる方が許せない』

これにはアベルはなにも言い返せず、ただひたすら口をパクパクさせた。

『わたしはな、欲しいものは絶対に手に入れる主義だ。今はなによりもそなたが欲しいから、そなたの結婚相手がわたしの娘以外の貴族の令嬢に決まるくらいなら、臣下たちの思惑に乗るのもためらわない』

要するにアベルを他の令嬢に奪われるのはいやだから、自分の娘に奪わせるということである。

さすがにあんぐりと口を開けてしまった。

この王様はなにを言い出したんだ？　と。

アベルを自分の息子にするために臣下たちすら利用すると言い切られたのである。

ある意味で恐ろしいほどの執着だ。

アベルは呆れるのと同時に背筋が寒くなった。

この王様から本当に逃げられるのかどうか、自信がなくなってきたからだ。

しかしやはり彼も人の子。

立ち去り際にこう言い置いた。

『それに娘たちにも否やはなさそうだ。さすがに姉妹で奪い合うに

なるのは頭が痛いが』

この発言にはふたりの方が慌てていた。

アベルはなにも言い返せずに赤くなって俯いただけだが。

と、いうわけでレイティアは孤児院への滞在が決まったのだ。

国王の決定ではだれにも逆らう術がない。

アベルが彼の言うことを認めたら、もしかしたら意見する権利くらいはあるかもしれないが、現国王である彼を無視することは難しいだろう。

そんな理由をマリンに言えるわけがない。

どうやら国王にもなにも教えられなかったらしいマリンが、あまりにぶつぶつと愚痴るのでアベルとしては肩を竦めるしかなかったりするのだ。

「アベルはいつから隠し事をするようになったの？」

もうひとり刺々しい女性がいた。

エルだ。

アベルは困ったような視線を向ける。

「彼女まで預かる金銭的な余裕はウチにはないのよ？　どうして勝手に引き受けたの？」

「そのことなら……マリン」

アベルに視線を向けられ、マリンは渋々席から立ち上がり彼女に近づいた。

シスター・エルがじっと見詰めていると、彼女の目の前にマリンがカバンを置く。

とても重そうなズシリという音がした。

だれもが息を飲んでその光景を見ている。

「おふたりの父上様が迷惑をかけるのだからと、おふたりの滞在のためにこれを用意されました」

「アベル！！　寄付金を受け取ったの！？」

血相を変えるシスター・エルにシドニーも顔色を青くする。

彼女の怒りが見えたからだが、同時に寄付金にしても、常軌を逸しているような金額であることがわかったからだ。

「寄付金じゃないよ。生活費」

「どっちにしても寄付金じゃないっ。貴族からでしょうっ！？　どうして受け取ったのっ！？」

「いや。だから、寄付金じゃなくてふたりを預かるに当たっての生活費だってば、エル姉」

「生活費にこんなに必要っ！？」

バンッとテーブルを叩くシスター・エルにアベルも困る。

アベルもやりすぎだと言ったのだが、王様はあっさりこう言ったのだ。

『だが、そなたがいなくなったとき、この孤児院も教会も生活に困窮するのだろう？　シスターが寄付金を受け取らないことは聞いたが、このくらいの額は受け取っておくべきだ。そなたがいなくなったとき、子供たちが餓死してもいいのか？』

と。

いなくなるような事態にはしないつもりだが、あの王様が相手だとそう断言することもためらわれて、結局アベルは押し切られたのだ。

しかし後でマリンに持ってこさせるからと言われたときは、正直ここまでの大金だとは思っていなかった。

エル姉を説得できない気がして不安だったが、やはりこうくるか。

王様はやはり金銭感覚が普通じゃない。

王になる前は庶民に紛れて暮らしていたらしいが、あの王様に平民の暮らしなんてできたのかと疑っていた。

「あの……シスター・エル」

レイティアが口を開いて、エルはなんの罪もない彼女を睨んだ。

睨まれてもレイティアは怯まないけれど。

「どうして生活費がその金額になったのかについては、いずれわかっていただけると思いますので、今は黙って受け取っていただけないでしょうか？　父も必要だと思ってしたことですし」

「本当に寄付金じゃないの？」

「違います。純粋に生活費です」

言い切るレイティアにエルは、ますますふたりの出自を疑うのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2810y/

千夜一夜

2012年1月14日06時52分発行